

行われた(気象研:牧野, 名大:近藤, 大和). 対流圏のオゾン, NO_y, H₂O, エアロゾル等が研究対象となった物質である. 対流圏の大気化学の発表は全体として少なかったが今後の大気化学の計画の進展に伴い, 日本のこの分野の発表が増えることが期待される.

このセッション全体としてみた場合, 講演の内容, 発表件数(特にアメリカ側の)など必ずしも十分ではなかった点はある。しかし, この会議に出席したアメリカの研究者との交流は良く行っていたという点で1つの良い機会であった。今後, 更にこのような交流の場が増えれば, 発表の質, 量共, 更に向上していくであろう。

3. おわりに

地球科学とくに地球物理系の8学会・1グループが一同に会し, 国際会議を初めて開いてみた結果は, 当初予想されていた以上の盛会であった。しかし, それら諸学会が何故一同に会する必要があったのかは, 必ずしも明確ではなかったようである。特に気象関係に関して言うと, その点についての疑問は小さくない。学問的成熟度からは例えば気象学と地震学との距離はまだまだ遠い。また, 色々と事情の違う各学会間の調整にも時間が要った。

それはともかく, 金沢会議の準備が後手後手に回りがちで, 会議の趣旨が生かせない面が多かったのは残念であった。金沢会議実行委員会での決定を受けて, ようやく天気誌に告示が出せた時期は講演申し込み締切日の約1カ月前といった案配であったし, 共催セッションの企画や調整, 招待者との交渉などもほとんど時間的に余裕がなかった。これについては, 会議中での組織委員会打合せ会でも反省点として指摘された。初めての経験ということもあって, やむを得ないところもあるが, 当報告中で安成氏も述べておられるように, セッションを担当されたコンビナとしては不満足な思いをされたことも多々あったろう。しかし, 色々な不都合は予想されていたことで, そういう困難な情勢の元にあった割には, コンビナや座長の方々の努力によって, 河崎氏の報告にあるように中成功といえる会議ができたのではなかろうか。

報告を終わるに当たって, プログラム委員の木村竜治氏をはじめとして, 気象学会金沢会議実行委員会の委員の皆さん, および当報告を寄せて頂いた各氏の, 金沢会議への惜しみないご協力に対し, 理事会はここに深く感謝の意を表します。

(気象学会・木田秀次)

日本気象学会誌 気象集誌

第II輯 第68巻 第5号 1990年10月

中村健治・猪股英行・古津年章・阿波加純・岡本謙一: X-, Ka-バンド2周波レーダによる降雨の観測
Pao-Shin Chu and James Fr ederick: 1982年5月の西太平洋赤道域における西風バーストと地表面熱

フラックス

C. McLandress and J. Derome: 低次成層圏モデルにおける定常波動の Wave-Wave Interaction の研究

上田 博・菊地勝弘: 十二花雪結晶の形成機構

秋山孝子: 1982年7月の梅雨前線の大規模・総観規模および中規模的変動 Part II: 前線帯の構造と擾乱

新田 勲: 1988年夏の日本の異常天候と熱帯との関係

井上豊志郎: 西太平洋熱帯海域における対流活動と海面水温・水蒸気量について

要報と質疑

花輪公雄・木津昭一: 日本南方海域における日射の現場観測

篠田雅人: 1960年代後半から1980年代中ごろのサヘルの長期的干ばつと大気循環